

鰐と河馬とパピルスの話

日本学術振興会カイロ研究連絡センター長 長沢 栄治
(前信州イスラーム世界勉強会代表)

〔蠅の話〕

11月になった。日差しも優しくなり、暑さが和らいできたためであろう、ふたたび蠅（ハエ）が元気に室内を飛び回るようになった。気が付かないうちに、体の周囲を至近距離でうるさくつきまとう。三階の居室では、洗濯物を干すとき、ベランダ側の戸の隙間をかいくぐって入ってくるようだ。同じく朝、下の事務室でも、しばらく風を通そうと思って、戸をうっかり閉め忘れていると、いつしか親しき気に傍らにいる。これまで蠅叩きは、事務室の方に一つあるだけなので不便をしていた。横着をして買わなかつたのだが、さすがに居室用に、もう一つの蠅叩きを裏通りの荒物店で求めることにした。

さて、何回も話してきたように、政治的には「無風の国」であるが、日常生活では面白いことにたびたび出会うのがエジプトである。荒物店には、大小、形と色を異にした蠅叩きが置いてあった。どれにしようかと見ていると、後ろから近づいてきた店の若女将？が言う。「手を広げてみて」と。そこで手の平を向けると、そこにピシャッと蠅叩きを打つてくる。「次のは、どう」と言って、また手の平をピシャッ。衛生観念はこの際、脇に置くことにして（もちろん未使用なのではあるが）、きわめて合理的な判断を求めてくるのである。「これが強くてよさそうだね」（心の声：「安そうだし」）と返事をした。

事務所は、カイロの高級住宅地、ナイル川の中州にあるザマーレク地区の表通り、7月26日通りに近い。この通りの名前は1956年にナセル大統領がスエズ運河国有化を宣言した日に由来する（1952年革命前はファード国王通り）。同地区は大使館が多く、東京でいえば港区の麻布や六本木に相当する。7月26日通りの上には高架道路が走っており、六本木に似ていると思っていることにしている。もちろん、ここには六本木のような怪しい歓楽街ではなく、若者に人気のおしゃれな高級カフェが並んでいて健全な雰囲気である。もっとも騒音とゴミ、そしてとくに事務所の近くでは蠅が元気なのが少し六本木とは違う。

しかし以前は、蠅の数はもっと多かった。今は事務所の近くの表通りには、しゃれたファストフードのお店が並んでいる。そして、その並びには清潔そうなガラス窓を備えた肉屋や魚屋がある。しかし、記憶によれば、これらの店はもっと“オープンな店構え”だったし、また隣に鳥屋もあって、



〔写真①：表通りの店〕

籠に入れた生きた鶏も売られていた。季節にもよるのだろうが（欧米人の感謝祭用？）、七面鳥がノッシノッシと店の前の歩道をあるいていたのを見たこともある。しかし、その後、おそらく鳥インフルエンザの蔓延の影響を受けて閉店になり、いつしか今風の飲食店に代わった。

蠅が多かったのは、こうした昔ながらの生鮮食肉店のせいだったと考えている。あるとき、店の裏に洗濯機のような形状の機械があるのを見かけた。これは「鶏の羽むしり機」と呼ばれ、回転するドラムの中に鶏を入れて、内側についているゴム製の指（または突起）で羽を自動的にむしり取る装置、だそうである。こんな機械があるのを見たと、研究者仲間の友人たちに話してみたが、誰も信じてくれなかった。

それもそのはずで、当時の私は退屈だったせいか、冗談や法螺話ばかりしていてため、何か面白いことを言っても誰からも信用されなくなっていたのである。そんな私にしばしば痛い目に遭っていた悪友の一人、社会学者の田中哲也さん（福岡県立大学）は、しまいには、眼が三角になっているときは嘘をついていると判る、などと言っていた。

〔鱈の話〕

その後も長らく私の信用は回復しなかった。加藤博さん（一橋大学）の広域農村調査に同行したことである。上エジプトのソハーグ県を車で走っていてふと窓から下を見ると、道路わきの水路を小さな鱈（ワニ）が泳いでいる。しかし、そのとき「アッ、鱈がいる」と言っても、これまで私の法螺話でひどい目に遭ったことのある加藤さんはじめ、だれもこの狼少年の話を信じてくれなかった。が、カイロに戻って、鈴木登さんに伝えると、鱈がエジプトに戻ってきたという話は聞いたことがあるという。さすがに物知りである。

最近、調べてみると、2016年にカイロの北の郊外、イスマイリーヤ運河沿いの地区でも鱈が発見され、住民がパニックになったことがあったという。同運河は、前の第3号でも紹介したマンゴー栽培で有名なイスマイリーヤまで、本来はスエズ運河の建設工事のために開削された水路である（1862年）。この鱈発見の報道に対し、当時の環境大臣は、無責任な飼い主がペットを放流したのが原因だと批判的なコメントを出した。しかし、専門家は、おそらく鱈はナイル川が高水位にあるとき、アスワン・ハイダムを越えてやって来るのであろう、という説を示した。

アスワン・ハイダムの完成（1971年）によってナイル川の流水は完全に遮断され、それ以降、ナイル・クロコダイルは、下流の地域にはほとんど見られなくなったと聞いていた。ただし一方、同ダムで出来た人造湖、ナセル湖は、鱈にとって格好の生息地となった。数千頭とも1万頭以上とも推計される鱈たちは、少数民族のヌビア人の漁師にとって魚を奪う強力なライバルとなっているという。

数千年にわたり、ナイル川の峡谷沿いにあった故郷のヌビアの村々は、アスワン・（ロウ）ダム（1902年完成）、そしてアスワン・ハイダムの建設によってすべて水没した。住民

の多くは遠隔地への移住を余儀なくされたが、一部の人たちはナセル湖の近くに残り、漁業を生業とした。ヌビアの人たちとその文化については、日本にも一時、住んだ音楽家ハムザ・エル・ディーン（1929-2006）さんが書いた『ナイルの流れのように』（中村とうよう訳、1990年、筑摩書房）がお勧めである。

スーダン調査のため、アスワン・ハイダム脇の波止場からフェリーボートに乗り、二昼夜かけてナセル湖を横断したのは、1982年2月のことである（本「カイロ通信」第0号参照）。スーダン側の新ワーディー・ハルファ港に着いたときに食べたナセル湖の魚料理は、今でも強烈に記憶に残っている。名前は分からぬがピラニアの親分のような、鋭い歯をむき出しにした魚たちの形相に食べる前、少々ひるんだ。

それから1年後、2年と4か月のエジプト滞在を終える頃、大量の書籍の郵送手続きが難しいので、小包で送るために本を抱えてギリシアまで行ったことがあった（拙稿「エジプトから本を送る話」（東京大学東洋文化研究所・東洋学文献情報センター「アジア研究Gateway」<https://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp/asj/html/es01.html> を参照）。そのとき泊まったアテネの安ホテルで知ったのが、ナセル湖のフェリーボート火災事故であった（1983年5月）。640人ほどの乗客のうち、半数は助かったが、残りは鱈が遊泳する湖で行方不明となった。貴重な出会いがあった1982年のスーダンへの船旅であったが、それは危険と隣り合わせであった。

〔河馬の話〕

最近、日本からのニュースで連日、報道されているのは、熊による被害である。野生動物による危害と言えば、エジプトでもかつてはライオンが生息していたことを想起する。ローマまで連れていかれ剣闘士と闘わされたのは、北アフリカ固有種の、厚くて長いたてがみを持つバーバリーライオン。少なくとも紀元前3000年頃にはたくさんいたが、新王国時代（紀元前1550-1070年）の頃から次第に数が減り、その後、絶滅した。アルジェリアやモロッコでは1960年代初めまでは見られたという話も聞く。エジプトでライオンの数が減ったのは、狩猟と植生の変化（乾燥化）によるものという。王権の象徴としても使われたライオンの狩猟は、王の特権であった。アメンホテプ三世（第18王朝第9代ファラオ）は生涯で100頭以上のライオンを狩ったという。

しかし、おそらく一般のエジプト人にとって日常的な脅威だったのは、草原に棲むライオンではなく、すでに述べたナイル川にいる鱈と河馬（カバ）であったろう。鱈が危険なのは分かるが、一方の河馬は鈍重で穏やかな印象がある。しかし、それは動物園の話であって、自然の中ではしばしば凶暴であり、しかも俊敏であった。農作物を荒らす害獣であり、日本の山の熊にも匹敵する。その河馬狩りは、獅子狩りと並んで、ファラオの勇気を示す重要な機会だった。今は、改装休園中のカイロ動物園（アフリカ最古、1891年開園）の正門には、河馬と闘うファラオの姿が描かれている。また若きツタンカーメンが小船に乗り、河馬に向けて銛を構える姿の黄金像も有名である。ただし、紀元前1214年に書かれ

た当時のエジプト旅行ガイドブックによると、「河馬狩りに挑戦するのは、勇敢な人か無謀な人か、または勇敢で無謀な人だけだ」という（シャーロット・ブース『古代エジプト王国トラベルガイド』創文社 2010 年 106 頁）。

一方、鰐も河馬も聖獸という側面もあり、それぞれ神として祀られた。河馬の女神タウレトは、妊娠・出産・母性を守護する神として、庶民に人気があった。しかし、鰐とは違って、河馬は急速に数を減らしていった。農民から害獸として嫌われて狩られたためである。しかも河馬肉は貴重なたんぱく源であったようだ。しかし、減少の大きな原因是、おそらく生息地域の環境変化の方であったろう。それは、ライオンのような北アフリカ地域の乾燥化ではなく、ナイル川で進む農地開発で葦生い茂る湿地の減少が決定的だったと思われる。エジプトで野生の河馬の姿が最後に見られたのは、1818年だという。ちょうど近代的な農業開発が開始された時期にも当たっていた。



【図①：河馬の神タウレト】

〔自然に対する暴力としての開発〕

その他の野生動物に話を広げると、古代エジプトの知恵の神様、トト神のイメージを作った朱鷺（トキ）が、エジプトで最後に見られたのは 1864 年だという（日本では 1981 年に野生絶滅、2003 年に最後の個体が死亡）。駝鳥（ダチョウ）は、19 世紀末までに急速に数を減らし、東部沙漠の南部、スーダン国境地帯でのみの棲息となった。これらの絶滅や減少の原因もおそらくは河馬の場合と同様、狩猟と環境変化によるものであろう。

しかし、また河馬と同じく、この二番目の原因である環境変化は、ナイル川をめぐる開発の問題と深くかかわっている。「開発」とは自然に対する「暴力」に他ならない（ハンナ・アーレント『人間の条件』（志水速雄訳）ちくま学芸文庫 1994 年）。この暴力には、最近の南米アマゾンの開発のように激烈な形を取るものもあれば、緩慢なものもある。エジプト人がナイル川の自然に加えた開発は、多くは緩慢であったが、またときに激烈であった。とくに近代において。

今日、私たちが目にするナイル川の光景は、古代以来、悠久に変わらぬものではない。たとえば、カイロでナイル川を眺めていると水面を塊になって流れてくるホテイアオイ（布袋葵）を見かけることがある。英語ではウォーターヒアシンスと呼ばれ、アラビア語では「ナイルの薔薇（ワルド・ニール）」という美しい名前をもらっている。その名からして、てっきりナイル川の水源のビクトリア湖あたりから、パカリップカリとエジプトまで流れてくるのか、と思ってしまう。しかし、この「薔薇」の原産地は、アマゾンであり、1880 年代にエジプトに観賞用植物としてもたらされたものである。しかし現在、各地の水路にはびこり、その蒸散活動によって、年間数十億立方メートルの水が失われ、貴重な水資源を奪うとして研究者から憂慮されている。一部の農民がホテイアオイを集めて家畜の飼料にしている姿を見かけることがあるがそれでは追いつかない。

[パピルスの話]

エジプトのナイル川の岸辺に今、パピルスは見られない。いつ頃にパピルスの植生が減少、そして絶滅したのかについては諸説がある。11世紀には自生するパピルスが見られなくなったという説を見つけた。一方、減少は8・9世紀から始まったが18世紀までは生えていた。しかし、19世紀に水路式灌漑への移行に伴い、絶滅したという説もある。その説によれば、エジプトでパピルスが最後に見られたのは、1820-21年、地中海沿いのダミエッタやマンザラ湖だったという西洋人の観察記録もあるようだ。すでに述べた河馬の絶滅と同じ頃である。その後1968年に、修道院で知られる西部の沙漠沿いのワーディー・ナトルーンで見つかったと言われる。

絶滅したパピルスがエジプトに再び植えられるようになったのは、1970年代のことである。観光施設「ファラオ村」の創設者、ハサン・ラガブ博士（1911-2004）が上流のスーダン・白ナイル川から移植したことによる。元々工学研究者であったラガブ博士は、軍に入って将軍にまで昇進し、その後1956年に初代エジプト在中国大使を務めた人物である。現在、パピルスの絵がエジプトの土産物の定番となっているのも博士のおかげである。

さて先に述べた、パピルスの絶滅と近代エジプトの灌漑制度の変化を関係づける説には説得力がある。19世紀初め、ムハンマド・アリーが有力な輸出作物として綿花に目をつけた結果、夏作である綿花の栽培拡大のため、古代以来の自然的な灌漑方式（ベイスン灌漑）を近代的な水路灌漑に改変する、近代的農業開発の歴史が始まった。この灌漑制度改革の結果、ナイル川は近代的なダムや堰、水路によって完全に統制されるにいたった。同様に数多くあった沼や低湿地帯も縮小した。この近代灌漑改革の総仕上げが、アスワン・ハイダムの建設である。その結果、ナイル川の年ごとの洪水の水位の変化によって伸び縮みした河川敷（河床部）も最終的に消滅した（拙著『エジプトの自画像』平凡社2013年、315-17頁）。当然、その河端に生えていた葦なども激減することになった。

しかし、ハイダム建設以前、あるいは近代的な灌漑制度の導入以前にすでにパピルスが生えなくなったのはなぜであろう。8・9世紀に減少、あるいは11世紀に無くなったという説から、その原因が推測できる。これは世界史の試験問題に使えるかもしれない。

回答の一つは、中国から伝わった製紙法がイスラーム世界に広がり、パピルス紙の需要が低下したというものである。タラス河畔の戦い（751年）は、ほとんどの高校の世界史教科書に載っている。アッバース朝が唐の軍隊と戦って勝利し、中国側の捕虜に製紙技術者がいたことで西方に製紙法が伝わった。しかし、新技術が伝わるには、受入側に経済的な需要、そして知的な関心が備わっていることが条件である。そうした条件がイスラーム



[写真②：今年2025年2月、鹿児島市で開催のパレスチナ問題講演会でチャリティ用に販売されたパピルスの絵]

王朝の側にあったということであろう。アッバース朝の下で、製紙業はサマルカンド（現ウズベキスタン）を中心に発展し、その後各地に伝わった。エジプトでは 850 年頃であったというから、たしかに 9 世紀以降のパピルス減少と関係がありそうである。

第二の回答は、エジプトにおける砂糖生産の拡大との関係である。サトウキビ（砂糖黍）の栽培と砂糖生産は、エジプトで 8 世紀か 9 世紀頃に始まり、11 世紀、ファーティマ朝の支配期に一気に拡大した（詳しくは、佐藤次高『砂糖のイスラーム生活史』岩波書店 2008 年参照）。大量の灌漑水を消費するサトウキビは水路沿いで栽培され、競合するパピルスの栽培に影響を与えたのではないか、という説である。つまり、そもそもパピルスは自然にナイル河畔に自生していた植物というよりは、有用作物として人々の手で栽培されていたのではないか、ということである。

古代においてパピルスは、紙だけでなく、建材、敷物、ロープ、籠など、さまざまな用途に使われる有用作物であった。パピルスを編んだ船は二か月ほどしか持たなかつたといふが、2, 3 人乗り用の小舟の他、12 本のオールを持つ大きな船も作られたという（前出『古代エジプト王国トラベルガイド』123 頁）。パピルスが顧みられなくなつて以降、葦（アシ）や蒲（ガマ）の類がその後を襲うことになった。

〔「イザヤ書」の話〕

以上のよもやま話は、多くがインターネットの検索の結果である。検索する中で『聖書』との関係を示す論説があるのが目に留まった。エジプトでのパピルスの絶滅は、すでに旧約聖書の「イザヤ書」で予言されていたという主張である。<https://x.gd/TaDQo>

それは「イザヤ書」第 19 章「エジプトの審判」の次の第 6 節の部分を指す。最後の審判に際して「運河は悪臭を放ち、下エジプトの支流は細り、乾いて葦もよしも枯れ果てる」（『聖書 新共同訳』日本聖書協会 2006 年（旧）1092 頁）。続いて第 7 節「ナイルの河口のいぐさも、川沿いに蒔かれたすべての草も枯れ、吹き飛ばされて、消え失せる」（同）となる（ただし、聖書の英訳を見る限り、パピルスの言葉はない。6…The reeds and rushes will wither, 7…also the plants along the Nile at the mouth of the river. Every sown field along the Nile will become parched, will blow away and be no more.）。

少し気になって話ついでに「イザヤ書」を検索すると、2 年前の 2023 年 10 月に始まるガザのジェノサイドに対し、これを非難する米国のキリスト教平和団体が以下のようなその有名な一節を引用しているのを見つけた。<https://x.gd/83Gac>

それは「イザヤ書」第 2 章「終末の平和」の第 4 節「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。國は國に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」（同上書（旧）1063 頁）の部分である。この平和を訴える有名な章句は、国連本部ビルにソ連が 1959 年に寄贈した彫刻としても表現されている。

この預言の章句には、たしかに胸に訴えるものがある。しかし、パピルス絶滅の「予言」と同じく、この言葉は、預言者イザヤが「万軍の主の日」である最後の審判の光景を描いた一部であることにも注意しなければならない。第11章第6節には「狼は子羊と共に宿り、豹は子山羊とともに伏す。=中略=牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛もひとしく干し草を食らう」とあるから（同（旧）1078頁）、肉食獸も草食生活を営むようになる“絶対非暴力”・“絶対平和”的世界である。

しかし、この平和は「主なる万軍の神」の御手によってもたらされるものである。イスラエルの民をいじめてきた傲慢な両大国、アッシリアとエジプトなど諸国に神の審判が下された結果としての「平和」である。先ほどのパピルスの絶滅の「予言」と同様、都合のいいところを切り取った引用ではないか、と言えないことはない。

しかし、もう少し深く考えてみたいと思う。

「イザヤ書」は「神の驚くべき御業」によるイスラエルの人々の帰還を予言している。しかし、イザヤが神から託されたこの預言に従うことなく、来るべき神の御業を無視してそれを待とうとはせずに、パレスチナに元々住んでいた人たちを追い出して創られた国が現代イスラエルである。そしてこの国が今また、神をも恐れぬ所業を続けている。この至言の意味を、その宗教的な文脈に今一度戻して考えることは、パレスチナ問題の本質を理解する手がかりになるのではないかとも考えた。

最後に前号の続きとして、最近カイロで出会ったパレスチナ人の話を書いておきたい。前の第3号でも紹介した画家のライエド・イーサさんのお兄さん、アドナーンさんにお会いした話である。

現在はカイロに住むアドナーンさんの家族に不幸があり、ライエドさんがお悔やみにフランスからやって来たというので、お二人に会いに行った。アドナーンさんは、ガザにいる息子さんが今回の停戦後の10月29日、イスラエルのミサイル攻撃で死亡、重傷を負ったその奥さんが訪問前日の11月14日に息を引き取ったばかりだった。アルジャジーラTVによれば、10月10日の停戦発効後、11月20日までに300名以上がイスラエル軍によって殺害されている。

また訪問した11月15日は、ちょうど二年前にライエドさんとアドナーンさんのお母さんが殺された日でもあった。高齢のお母さんは、壊されたビルの窓から侵入したドローンによって狙い撃ちされた。それはアドナーンさんが歴戦の政治活動家だったからである。ハマースではなく、PLO主流派のファタハに属し、中部ガザの県知事も務めたこともある



[写真③
剣を鋤に打ち直している男の像
(エフゲニー・ヴェチェティチ作)]

という。人生の半分をイスラエルの監獄で過ごしてきた人だ、と一緒にいた友人は語っていた。現在はスポーツ青年省の要職にあり、2年前はカタールで開催されたバスケット大会に役員として参加していてガザに戻れなくなったままでいる。また、機会があれば、そのとき弔問に訪れた彼の仲間や友人たちから聞いた話を紹介したい。ここではアドナーンさんが語った以下の言葉を記すだけにする。

「私たちはイスラエルによって、次々に火にくべられて“燃やされる薪（ハタブ・ムフタラク）”のようなものだ。だからたくさん子どもを作るのだ」（アドナーンさんのお母さんは13人の子どもを生み、彼にも13人の息子と娘がいる。しかし、すでにこの2年間で親族のうち40名が殺されている）。

「今回の〔ガザのジェノサイドで受けた〕私たちの苦しみに較べるなら、1948年の時〔ナクバ〕に味わった苦しみの方がはるかに大きい。あのとき私たちは家を追い出され、土地を奪われたからだ」。